生涯教育学の課題

文教大学　平　沢　　茂

1．ラングランと生涯教育学

他の教育学関係の諸研究と同様、生涯教育研究が学として成立しているか否かには、当然多様な見解がありうる。特に、生涯教育研究に関しては、概念そのものが新しいこともあって、いっそう不確かな面をもっている。もっとも、この点についても複数の見解がある。一般に、生涯教育の概念は、1965年のユネスコ成人教育推進国際会議におけるラングラン（Lengrand,P.）の基調講演以後の議論を踏まえて展開されつつあると見る。

ところが、研究者によっては、生涯教育の理念は、もっと古くから存在すると見る者もある。このような見解では、ハビーガースト（Havighurst,R.）の発達課題研究が持ち出されることが多い（注１）。すなわち、人間は、生涯の各時期（発達段階）に固有の学習課題（発達課題）を持つこと、また、その課題とは何か、を明らかにした研究である。あるいは、「人間、生涯、勉強だ」という素朴な見解を取り上げ、生涯教育など、昔から言われてきたことだとする意見もある。

しかし、ラングランによる問題提起には、これらの見解とは決定的に異なる点がある。

まず第１は、社会的要請の視点の有無、ないし軽重に関する相違である。発達課題研究、および人間生涯勉強論に共通しているのは、主として、個人の生涯における教育ないし学習の必要性を論じている点である。発達課題研究には、社会的視点が含まれてはいる。しかし、どちらに比重がかけられているかと言えば、やはり個人の発達と学習課題との関係に焦点が当てられていると言わなければならない。これに対し、ラングランの問題提起は、生涯学習の必要性を、個人的要請の視点からだけではなく、社会的要請の視点にも配慮しながら説いた点に特長がある。発達課題論との相違を意識すれば、ラングランの生涯教育論は、むしろ、社会的要請にいっそうの比重がかけられていると見ることも可能である。

第２は、生涯教育を支える教育の仕組みに関する問題意識の有無である。よく言われるように、ラングランの生涯教育論の弱点の１つは、生涯教育の内容や方法、あるいは教育制度的な問題に関する論究の弱さである。しかし、ラングランはこの点について何も触れていないわけではない。確かに、問題提起全体からすれば薄弱に見えるものの、1970年に刊行された『生涯教育入門』には、それらに言及した部分が多い。これに対し、発達課題研究や人間生涯勉強論には、こうした視点はほとんど欠落していると言って良い（注２）。

このように、現在、研究者の研究対象となる生涯教育の概念は、基本的なところで、ユネスコ

の先の会議における問題提起によっていると考えて良い。その中には、ラングランの論を肯定的に捉える研究、否定的に捉える研究の双方があるのは当然である。つまり、生涯教育研究、ひいては生涯教育学は、やはりラングランの生涯教育論の登場によって生み出されたものと言わざるをえないのである。したがって、生涯教育学の現状や問題、また、教育経営学との関連を考えるためには、やはりラングランの生涯教育論を一通り概観することが必要となる。

2．ラングランの生涯教育論

ラングランの生涯教育論に対しては、上述したように、必要論（必要性に関する理論的考察）だけあって、その具体像が見えないという批判がある（ないし、あった）。確かに、新たな教育課題の提起という意味もあって必要性の議論に大きな比重がかけられていたことは間違いない。そこで、まず、この点からラングランの生涯教育論とは何なのかを考えていくことにしよう。なお、以下の考察に関しては、ラングランの生涯教育に関する著作のうち、最も基本的な著作と考えられる先の書（『生涯教育入門』）をテキストとすることをお断りしておきたい。このテキストは、1965年の彼の基調講演からさらに5年を経て書かれているため、両者の間には若干の相違がある。しかし、基調講演に比較して、①その後の彼の研究の進展が明白なこと、②多少は、ユネスコ職員としての立場を離れて、個人的な見解に踏み込んでいること、という2つの点で、彼の生涯教育論がいっそう読み取りやすい。

(1) 生涯教育がなぜ必要か

先に、発達課題研究等との相違を考察する中で、ラングランの生涯教育論には、個人的要請の視点と、社会的要請の視点とがあると述べた。まず、それを検証してみよう。

『生涯教育入門』の第1章は、「現代人の直面する難題」(challenges that face modern man) である。波多野完治氏の訳書では「現代人に対する挑戦」と訳されている章である。ここでラングランは、現代人が直面し、解決を求められている9つの課題を挙げている。

① 変化の加速化 (acceleration of change)
② 人口の増加 (demographic expansion)
③ 科学・技術の進展 (evolution of scientific knowledge and technology)
④ 政治的難問 (political challenge)
⑤ 情報 (information)
⑥ 余暇 (leisure)
⑦ 生活様式と人間関係における危機的状況 (crisis in patterns of life and relationships)
⑧ 身体 (the body)
⑨ イデオロギーの危機的状況 (the crisis in ideology)

challengeとか、crisisとか、やや刺激的な用語が多いこと、個々の内容の説明になると抽象的で

難解な表現が多くなること、などなじみにくい本である。これは、彼がユネスコの職員であることに関係がある。前述したように、このテキストでは、個人的な見解に踏み込んでの議論がなされているとは言え、国際会議の場で基調講演をした彼の立場を、すべて無視して記述することは不可能だからである。利害の対立する国や地域が現存する以上、一方の国や地域に不利になる記述ができないのは仕方のないことであった。

さて、こうした問題を抱えてはいるもののよく読むと、彼が主張したいことは明白に浮かび上がってくる。詳述は紙数の関係で無理なので要点をかいつまんで述べておこう。

地球上の人口の増加、科学・技術の進展、政治的難問、社会の情報化、余暇の増大、急激な価値観の多元化、性の商品化、民族・宗教・政治的イデオロギー等の対立、など、現代の世界は多様な変化に直面している。これらの変化は難問で、しかも、加速度的に進行している。

このような難問を解決するために何よりも重要なことは、実質的な民主主義である。形骸化した民主主義や独裁的な政治では、民主解決が不可能である。

では、実質的な民主主義を実現するためには何が必要か。それは、一人一人の人間が、自分なりの状況判断に基づいた見解を持ち、それらの見解を突き合わせていくことだ。ラングランはこう考える。つまり、他人に操作されない自立的な人間の育成が急務だと考えるのである。この辺りの文脈は、先のテキストでは、明快さを欠いている。しかし、その後に書かれた『生涯教育入門／第二部』では踏み込んだ表現で述べられている。

「伝統的教育は、権威――あらゆる種類の権威の手中にあると強力な道具である。権威が望むものは、素直で従順な民衆であり、生産者であれ、市民であれ、社会の様々な構造の要素であれ、かれらに割り当てられた位置と役割とをおとなしく疑問も持たずに受け入れるような民衆である。……（中略）……

もしこれが、我々が目指している人間のタイプ――自分自身の魂を持たず、その考え、趣味、決定などを外から押し付けられる人――であるならば、現在の状況に実質的な変化をもたらす根拠はない。」（注３）

このように、ラングランの生涯教育論は、単に個人的な発達の視点から生涯教育の必要性を説いているのではない。個人的発達は、社会の急激な変化、それによって発生する諸問題を解決するための必要不可欠の教育課題だ、と言うのである。

(2) 統合

ラングランの生涯教育論のもう１つの柱が統合（integration）である。このことは、あちこちで述べられているので、ここでは詳述は控えたい。ポイントは、時間的、空間的に広がった様々な教育の機会を、生涯教育の視点で統合する必要性を説く点にある。ただし、具体的にどうしろ、と述べてはいない。そういうわけで、具体的な、方法論を欠く、というラングランへの批判は、主としてこの点に関するものと言って良い。しかし、それはないものねだりと言うものである。生涯教育のための教育システムは、各国がその国の実情に応じて組み立てるべきもので、ラング

ランがそれをどうしろと言えるわけはないからである。

ことに、重要な視点は、学校教育と社会教育との統合だろう。しかし、この表現は、学校教育関係者に強い嫌悪感を与える。学校教育の存立基盤を危うくする感を与えるからのようである。しかし、これは誤解である。

学校教育には学校教育の意義があり、社会教育には社会教育の意義がある。それぞれに長所があり、短所がある。これらを眺めわたして生涯教育の視点で役割を分担し、協力・連携し合って人々の学習（生涯学習）を支えようというのである。必要な再編は当然だが、当面、学校教育、社会教育の独自性を否定するというわけではない。将来、学校教育、社会教育が、まったく異なったかたちに組み替えられることがあるのかも知れないが、現時点でそのような必要はまったくあるまい。つまり、学校教育と社会教育とが、生涯教育という視点で結び合うことにほかならない。

３．生涯教育学の現状と課題

ラングランの生涯教育論が提起されて、すでに30年になろうとしている。その間、ユネスコの生涯教育論にも、ラングランとは異なった立場からの論が登場する。ジェルピの論である（注４）。

ジェルピ（Jelpi.E）の論は、生涯教育の本当の理念が自立への闘いの強化をもたらさない範囲でしか許容されていない、として、正しい生涯教育の方向を目指す努力が必要だと説く。ジェルピの論は、ラングランの生涯教育論を否定するものではない。むしろ、ラングランの生涯教育論を理想に終わらせないために、何が必要かを説く点にその特長がある。

ひるがえって日本の生涯教育学は、どのような展開をしてきたか。ラングランの生涯教育論が日本に紹介されたとき、生涯教育に対する肯定的な論もあったが、真っ向からこれを否定する論も見られた。また、批判的に受容するという論もあった。しかし、この点に関して十分な議論が展開されたかと言えば、必ずしもそうではなかったと言わざるをえない。１つには、批判論の多くが、感情論、食わず嫌いに属するものであったこともある。中には、持田栄一の体系的な批判論もあったものの、十分な議論を呼ぶには至らなかった（注５）。

そうこうするうちに、時機を見ていた文部省が、中教審答申「生涯教育について」（1981年６月11日）を公にした。さらに追い打ちをかけるかのように臨教審が４次にわたる答申を出すに及んで、生涯教育は、国の教育政策の中枢に位置付けられるようになった。

この経緯を見る限り、生涯教育の理念に関してはたしてどの程度の共通認識が得られているのか、はなはだ心もとないという感想を持たざるをえない。一つには、研究レベルでの、生涯教育の理念そのものに対する議論が十分に深められていないからである。日本の生涯教育学の現在における最も基本的な課題は、このことである。このことを最も明確に示していることがある。

それは、文部省の改組である。生涯教育を文部行政の１つの柱にする意図で行われた改組で、生涯学習局が生まれたことは記憶に新しい。その生涯学習局が実は、社会教育局の衣替えであった。前述したラングランの生涯教育論における統合の理念を考えれば、これがどれほど半端な改組であるかは言うまでもない。また、生涯教育＝社会教育の誤った認識が生まれた背景には、このことがあったことは間違いあるまい。要するに、現在の日本における生涯教育学は、基本的な理念の検討ないし普及・啓蒙のレベルで、十分な役割を果たし得ていないのではないか、と結論せざるをえないのである。

したがって、教育行政学や教育制度学、教育経営学など関連研究分野に貢献しなければならないことは明瞭であるにも関わらず、現時点では、それが果たされていないと言わなければならないのである。

４．生涯教育学と教育経営学

生涯教育学の現状をありていに述べて、教育経営学への貢献に十分その役割を果たしえていない現状を指摘した。しかし、それは、生涯教育学が、教育経営学に貢献しえないものであることを意味するわけではない。生涯教育学が、まだまだ未発達であるために、現在のところ、十分には貢献しえていないというに過ぎない。今後、生涯教育学の研究者がこの辺りの事情を十分に汲み取り、また、生涯教育学自体の発展への展望を含めて検討がなされるようになれば、教育経営学への貢献は十分になされうるものと考える。少なくとも、両者の間には、問題意識の関わりのレベルで考えれば、重なり合う点が大きいからである。

教育経営学は、教育の理念・目標、教育の仕組み（教育制度）、教育の運営（教育行政、学校経営、社会教育経営）など広範な領域を研究の対象としている。これらの諸点に関し、生涯教育学は、一まとまりの理念を呈示することが可能である。すでに述べたように、生涯教育の必要性の議論の中から、教育の理念・目標に関して、たとえばラングランの所説からだけでも、明快な指針を提供することが可能である。「新しい学力観」という言葉が流布されている。やや不明確な表現である。しかし、これに、ラングランの所説を当てはめると、かなり明快な解答が得られる。あるいは、リカレント教育の理念も、実は生涯教育の理念にまつわる課題として提起されている。あるいは、学校週五日制などの問題に関しても、社会教育との連携や協力の問題の解決の視点を、生涯教育の理念の観点から提供しうる。

ただし、そのためには、生涯教育学自体に未解決の問題が残されている。そのことは、ここまでの記述からも、ある程度は理解されよう。最後に、それらについてまとめておこう。

第１に、繰り返し述べたように、生涯教育の理念に関する議論の深まりである。何のための生涯教育か。生涯教育の目的・目標とは何か、に関する議論である。生涯教育学が、単なる技術論に矮小化されることを避けるためにも、必要な研究課題である。

第２は、生涯教育の理念を生かすための仕組みの研究の深まりである。学校教育の在り方、社会教育の在り方、その他、多様な教育の機会を生涯教育の視点でどう再編するかの研究である。特に、この面では、学校教育関係の研究が遅れている。これは、先の文部省改組の問題とも関連するが、生涯教育の研究者が、現在のところ、社会教育の研究をしてきた者を中心に進められている点に関わりがありそうである。その意味では、学校教育の研究に従事してきた者の貢献を期待したい。

なお、我田引水を承知で書き添えたいことがある。それは、筆者の所属する大学は、今年度（1993年度）、日本で最初の生涯学習学専攻を持つ大学院を設置した。生涯教育学でなく生涯学習学である点をどう考えるか、生涯学習を学として成立させるとはいかなることか、など、移籍したばかりの筆者には難しい問題ではある。しかし、新しい学問分野の確立に取り組む意欲だけは失わずに、多少なりとも、この問題に寄与することができるよう努力を積んでみたいと思っている。

注

1．ハビーガースト＝荘司雅子訳『人間の発達課題と教育―幼年期より老年期まで』牧書店、1958年。

2．ラングラン＝波多野完治訳『生涯教育入門』全日本社会教育連合会、1971年。

3．ラングラン＝波多野完治・他訳『生涯教育入門／第二部』全日本社会教育連合会、1979年、pp.62－63

4．ジェルピ＝前平泰志訳『生涯教育―抑圧と解放の弁証法』東京創元社、1983年。

5．持田栄一『「生涯教育論」批判』明治図書、1976年。